

ロシア語における「歴史的現在」とその問題点⁽¹⁾

金 田 一 真 澄

1. はじめに

「歴史的現在」は、従来の言語学では完全には規定することのできないテーマである。ラングよりパロールを、話し言葉よりも書き言葉を、文よりも文脈を、話し手だけでなく聞き手をもそれぞれ研究対象としなければならないからである。そしてまたこの用法が、文体論、修辞学などの領域にまたがっていることも、言語学的研究を困難にしている。

従って、今までの文法書では、「歴現」（以後「歴史的現在」をこう呼ぶ）の扱い方は著者によって様々であり、著者の好みや主観が強く反映された偏ったものとなっていた。以下に代表的なものを4つ挙げる。

(1)ソ連学アカデミー『60年版ロシア語文法』⁽²⁾では、不完了体現在形の意味用法を、発話時の現在、過去を表わす現在、恒常的現在、未来を表わす現在の4つに分けて説明しており、「歴現」用法（即ち過去を表わす現在）が“発話時の現在”用法と対等に扱われている。「歴現」がこのように優遇されたのは、執筆者 В. В. Виноградов が不完了体現在形の第一義を“Вневременность”（超時性）と考えて、⁽³⁾ その下位に上述の4つの意味用法を置いたためであろうと思われる。

一方、内容の面では、文学のレトリックとしての「歴現」の例が挙がっていて、数行程度の使われ方をする場合と作品全体が現在形で占められる場合の二種類の用法が取り上げられている。

(2)同じくソ連科学アカデミー『70年版現代ロシア語文法』⁽⁴⁾では、二項対立を用いて時称全体を区分し、まず過去と非過去を分け、非過去を現在と未来に分けている。現在は更に本性的現在（発話時の現在）と非本性的現在とに分かれ、「歴現」は、その非本性的現在の4つの用法から更に外れた転義用法として、未来用法と共に扱われている。

説明は二行ほどで、歴史的事実を記述する場合の「歴現」用法の例が1つ挙げられているだけで、前述の『60年版』がもっぱら文学的レトリックとしての

「歴現」用法の例を多数挙げていたのと好対照をなしている。

(3)チェコのプラハ版『ロシア文法』⁽⁵⁾での時称区分の仕方は、R. Jakobson の提唱した⁽⁶⁾時称の二項対立に従い、不完了体現在形は無標項“非過去”として位置づけられている。発話時の現在や習慣の現在など5つの基本的用法を挙げた後に、「歴現」は未来を表わす現在と共に転義用法として扱われている。

「歴現」の説明では、ロシア語の「歴現」が不完了体現在形だけであることを強調、用例は直接話法を導く動詞の例と歴史的事実を記述する場合の用法の二つが挙がっている。

(4)最も新しいソ連科学アカデミー『80年版ロシア文法』⁽⁷⁾(「歴現」の項の執筆者は A. B. Бондарко)では、不完了体現在形の基本的用法として発話時の現在を第一に挙げ、次に恒常的現在、抽象的現在を説明し、更に派生的用法として、詩の現在、卜書の現在、あらすじの現在などの用法を列挙、最後に転義的用法として「歴現」と未来用法が扱われている。

内容的には、文学のレトリックとしての「歴現」についての説明が多く、特に会話文中⁽⁸⁾の生き生きした効果を与える「歴現」と、地の文中の語りの時間面の一つを表わす「歴現」⁽⁹⁾の説明が特徴的である。例としては、このレトリックの2つの用法と、伝記書の記述に用いられる「歴現」の例が挙がっている。

このように、4つの文法書における「歴現」の扱いはそれぞれきわめて個性的であり、共通要素を見出す方が難しい程である。こうした文法書による「歴現」用法の扱い方の違いは、もとを糺せば、「歴現」の研究者達(A. B. Бондарко,⁽¹⁰⁾ П. С. Кузнецов,⁽¹¹⁾ H. Křížková,⁽¹²⁾ Н. С. Поспелов,⁽¹³⁾ Е. Н. Прокопович,⁽¹⁴⁾ その他⁽¹⁵⁾)の考え方の違いに因由するものであり、例えば、Прокопович, Křížková は完了体現在形による「歴現」をロシア語において認めるべきであることを主張し、⁽¹⁶⁾他の研究者達と大きく意見を異にしている。

本論文では、広義の「歴現」を取り上げ、様々な実例を挙げ吟味することによって、ロシア語の「歴現」用法の全体像を浮き彫りにし、その整理した結果をもとに言語学における「歴現」の扱い方について考察するものである。

実例を整理する際には、便宜的に「歴現」用法を次の3つに分けて、各分析を行なった。

①民衆の話し言葉の中で使われる「歴現」

②文学のレトリックとして使われる「歴現」

③歴史的事実を記述する際に使われる「歴現」

このように3つに分類した理由は、①と②とが極めて異なる性質をもっていることを明確にしておきたかったからである。従来の文法書では、②と③の違いには比較的敏感であったが、①と②との区別については殆んど触れられず、②の中に①を含めている場合が多かった。しかし、結論のところでも述べるように、①と②の違いは単に歴史的に観て①が先にあって①から②が生じたというような単純な違いだけではない。

①の用法では、語り手がいて具体的な聞き手を前にして自分の体験したことや聞いた話などを語って聴かせるのであるから、そこでは語り手主導型の伝達が行なわれる。従ってこの用法では分析の焦点は語り手となり、語り手がどのような状況において「歴現」を用いるのかが問題となる。

一方、②では、近代文学の発達と共に語り手と聞き手の関係は、作者と読者の関係へと移っていく。そこでは、作者は目に見えない不特定多数の読者を相手にして作品を書かねばならない。聞き手の表情を確かめながらの語り手とは異なり、近代文学の作者はどのような表現を用いれば読者がどのように反応するかということを、あらかじめある程度客観的に計算し、予想しながら作品を書かねばならない。そこでは作者の意図はすべてテキストを読者がどう受けとるかに依存している。従ってこの用法を分析する際には聞き手の側、つまり文章テキストを読む読み手の認知の仕方がポイントとなるのである。(この①と②との違いは、E. Benveniste の「談話」と「物語」の区分とも関連している。注(8)参照)。

本論文では、完了体現在形の例については、Бондарко 等多数派の学説に従い、省略した。⁽¹⁷⁾

2. 素朴な民衆の話し言葉の中に見られる「歴史的現在」用法

O. Jespersen⁽¹⁸⁾ は、英語の「歴現」が他の学者達の考えるようにフランス語やラテン語の文学からの影響によって輸入された用法ではなく、イギリスの古代民衆の話し言葉にあった用法が引き継がれてきたものであるということを指摘した。

ロシア語の場合も同様のことが言えると思われる。

例えば、А. А. Потебня⁽¹⁹⁾ は、古代ロシア語の時代において民衆の話し言葉の中で「歴現」がさかんに用いられていたことを示唆して次のように述べてい

る。

「古代ロシア語で書かれた『オストロミール福音書』を初め、その他、古代教会スラヴ語で書かれた翻訳書においても、原書のギリシア語の「歴現」で書かれた箇所はアオリスト時称で翻訳されていて、現在時称は殆んど現われていない。このことは当時の翻訳者達が、原文を古代ロシア語の「歴現」で翻訳することは文体的に見てあまりに口語的で、俗語的な色彩が強すぎると判断して、それを回避する意味でアオリストを用いたのではないか……」

一方、Кузнецов⁽²⁰⁾ は、古代ロシアの文学作品『イーゴリ遠征物語』において「歴現」が多用されている事実⁽²¹⁾ を指摘し、こうした「歴現」の用法を、語り手による主観性表現であると述べている。

〈例1〉⁽²²⁾ Трубы трубятъ въ Новѣградѣ, стоятъ стязи въ Путивлѣ; Игорь ждетъ мила брата Всеволода.

庶民の話し言葉として用いられた「歴現」は、古代ロシア文学の中だけでなく、口碑文学のブイリーナや民話の中にもさかんに用いられている。⁽²³⁾

〈例2〉⁽²⁴⁾ Скоро Иван на двор прибежал,
И приходит он во светлу гридню
Ко великому князю Владимиру,
Спасову образу молится,
А Владимиру-князю кланяется

〈例3〉⁽²⁵⁾ Поблагодарил его Василий-царевич, заплакал и пошел...
Вот он идет да идет по улице, и попадаетъ ему навстречу
голубая шапка: спрашивает его...

Д. С. Лихачев⁽²⁶⁾ は、ブイリーナのテンス機能に関して、主人公の急激な動きの描写に対しては過去形が、ゆっくりした動きに対しては現在形がそれぞれ使われやすいことを指摘している。〈例2〉でも、прибежал, приходит, молится, кланяется となって、指摘通りの傾向を示している。〈例3〉はアフナーシェフの民話集から採った例であるが、ここでの現在形の用法は〈例2〉の場合と異なった傾向を見せていて、更に別の要因を考慮しなければならない。

次に民衆の生き生きした言葉を反映した作品、クルイローフの『寓話詩』を見てみる。

〈例4〉⁽²⁷⁾ По улицам Слона водили,

Как видно напоказ ——
 Известно, что Слоны в диковинку у нас ——
 Так за Слоном толпы зевак ходили
 Отколе ни возьмись, навстречу Моська им.
 Увидевши Слона, ну на него метаться,
 И лаять, и визжать, и рваться,
 Ну, так и лезет в драку с ним.
 《Соседка, перестань срамиться, ——
 Ей шавка говорит, —— тебе ль с Слоном возиться?

この例で、「つれていかれた」「ついて行った」は過去形で、その後の「(けんかを)引き起こす」「言う」は現在形で表わされている。

A. H. Гвоздев^[28] は『寓話詩』に言及して、これらの寓話の中には導入部が過去形で、その後の展開部に「歴現」が用いられている作品が少なくないことを指摘し、作品名^[29]を列挙している。

このように、物語の初めに過去形が用いられ、その後現在形が現われるというパターンは、民衆が自分達の体験談を話して聞かせる時に見られる、ごく自然なテンス用法のパターンであるように思われる。換言すると、初めに叙述を担った過去形が、物語全体が過去に属するものであるという認識を聞き手に与える時間的位置づけの役割^[30]をしているとするならば、その過去形の枠組の中で用いられる現在形は一種の“無時間性”“超時性”あるいは“同時性”として機能していると考えられる。このような用法は、テンスの一般に有する“冗長性”^[31]を逆手にとったものと見ることもできそうである。

その他、民衆の用いる「歴現」用法の特徴として、直接話法を導入する動詞（言う、語る、答える……）の現在形の多用が挙げられ、フォークロアやそれに近い文体を用いる文学作品に見ることができる。

<例5>^[32] Владыко и говорят :

《Ты ли это, пресвятой отче Сергие?》

А угодник отвечает :

《Я, раб божий Филарет》.

Владыко спрашивают :

《Что же твоей чистоте угодно от моего недостойнства?》

А святой Сергей отвечает :

《Милости хочу》.

《Кому же повелишь явить ее?》

А угодник и наименовал того попики, что ...

この例は、フォークロアや民衆の言葉に深い関心を示したレスコーフの『魅せられた旅人』から採ったものであるが、「歴現」のこのような用法は、『プラハ版ロシア文法』の中だけに見られるもので、他の文法書では一切触れられていない。^[33] 標準ロシア語から外れた俗語的用法と見なされて、斥けられたことによるものとも考えられる。

このような用法は、ロシア語だけでなく、英語の直接話法導入動詞“say”^{[34][35]}や日本語の古典^[36]の中にも見られる傾向である。

3. 文学のレトリックとしての「歴史的現在」用法

(1)「歴現」を最初に洗練された文学的手法として用いた作家は、やはりプーシキンであろうと思われる。それまでの「歴現」用法が、単に民衆の話し言葉の中の言い回しとしての「歴現」を文章中でそのまま文字化したに過ぎなかったのに較べて、プーシキンは、レトリックとしての機能（例えば、生き生きとした臨場感を読者に呼び起こすこと）を意図して、読者に対して最も効果的な場面において「歴現」を用いたのである。

〈例6〉^[37] ... Сильвио стал в меня прицеливаться. Вдруг двери отворились, Маша вбегает и с визгом кидается мне на шею.

〈例7〉^[38] В это время из толпы народа, вижу, выступил мой Савельич, подходит к Пугачеву и подает ему лист бумаги. Я не мог придумать, что из того выйдет.

〈例6〉『その一発』では、伯爵の語りの中で「歴現」が用いられている。物語はクライマックスを迎え、突如伯爵夫人が飛び込んでくる場面で、“вдруг”^[39]と呼応するように現在形が現われる。この語りの現在形への移行によって、場面は緊迫の度を増し、読者は現在形の有する“物語の進展時間の停止”機能^[40]によって、映画のスローモーション場面を見るような感覚で息を詰めるのである。

〈例7〉『大尉の娘』では、主人公の「私」が見た光景が、地の文中で「歴現」によって描写されている。“вижу”と現在形の呼応によって、主人公の見た情景が追体験している読者の眼前にありありと浮かび上がってくる効果を狙っているのである。

〈例6〉のタイプを「突然展開型」（または「レーマ強調型」）、〈例7〉を

「視覚動詞型」と呼ぶとすると、プーシキン（プーシキン）の散文小説における「歴現」用法は、殆んどこの2つの型のどちらかに分類することができる。

こうしたことから、プーシキン（プーシキン）は「歴現」をレトリックとして意識して用いており、主としてクライマックスを盛り上げる効果（突然展開型）と、読者の眼前に情景が浮かび上がってくる効果（視覚動詞型）を意図していたことがわかる。『80年版ロシア文法』で「歴現」の典型として挙げられた例⁽⁴⁰⁾も、実はこの「視覚動詞型」用法であり（例文中に“глядь”が含まれている）、それ故生き生きした描写効果を生み出しているが、「歴現」用法のすべてがこの効果を持っているわけではない。

プーシキン（プーシキン）の用法で見逃してならないことは、一つは彼の用いた「歴現」が数行程度の比較的小規模な用法であるということである。その理由は、恐らく彼の用いた「歴現」がその効果を最大限に発揮する状況が、過去時称から現在時称への交替の瞬間においてであるということ（プーシキン）を見抜いていたからではないかと思われる。彼の用法のもう一つの特徴は、彼の用いた「歴現」の殆んどが、登場人物の語りの中（全散文小説において5例）か、または1人称小説の主人公である「私」の語りの中（同9例）で用いられたものであり、3人称小説の地の文中で用いられた「歴現」は1例（『ドゥブロフスキイ』）⁽⁴²⁾にすぎないことである。このように常に話者（語り手）が具体的にいて、その人の語りの中で「歴現」が用いられているということは、プーシキン（プーシキン）の用いたレトリックとしての「歴現」も、結局、民衆の話し言葉の中で用いられる「歴現」と深いところで結びついていることを示していると思われる。

(2)ロシア文学の中で、「歴現」をレトリックとしてより徹底させて、作品の中で多用したのはチェーホフである。彼の作品においては、「歴現」は小説の地の文の中で、しかも多くが語り手の具体的に存在しない非人称的語り、即ち3人称小説の地の文中で用いられている。

〈例8〉⁽⁴³⁾ Через базарную площадь идет полицейский надзиратель Очумелов в новой шинели и с узелком в руке. За ним шагает рыжий городской с решетом, доверху наполненным конфискованным крыжовником. Кругом тишина ... На площади ни души ... Открытые двери лавок и кабаков глядят на свет божий уныло, как голодные пасти; около них нет даже нищих.

〈例9〉⁽⁴⁴⁾ （基準時間面）

Токарь Григорий Петров, издавна известный за великолепного мастера и в то же время за самого непутевого мужика во всей Галчинской волости, везет свою больную старуху в земскую больницу. Нужно ему проехать верст тридцать, а между тем дорога ужасная, с которой не справиться казенному почтарю, а не то что такому лежебоке, как токарь Григорий.

(より以前の別の時間面)

Токарь помнит, что горе началось со вчерашнего вечера. Когда вчера вечером воротился он домой, по обыкновению пьяненьким, и по застарелой привычке начал браниться и махать кулаками, старуха взглянула на своего буяна так, как раньше никогда не глядела. Обыкновенно выражение ее старческих глаз было мученическое, кроткое, как у собак, которых много бьют и плохо кормят, теперь же она глядела сурово и неподвижно, как глядят святые на иконах или умирающие. С этих странных, нехороших глаз и началось горе.

<例10>⁽⁴⁵⁾ В селе Райбуже, как раз против церкви, стоит двухэтажный дом на каменном фундаменте и с железной крышей. В нижнем этаже живет со своей семьей сам хозяин, Филипп Иванов Кашин, по прозвищу Дюдя, а в верхнем, где летом бывает очень жарко, а зимою очень холодно, останавливаются проезжие чиновники, купцы и помещики.

<例11>⁽⁴⁶⁾ «Тик-ток, тик-ток ...—— лениво стучал сторож. —— Тик-ток ...»
В большое старое окно виден сад, дальние кусты густо цветущей сирени, сонной и вялой от холода; и туман, белый, густой, тихо подплывает к сирени, хочет закрыть ее. На дальних деревьях кричат сонные грачи.

<例12>⁽⁴⁷⁾ На другой день утром меня нарядили в полушубок и валенки и повезли на охоту.

Я вспоминаю теперь большой ольховый лес, седой от инея.

Тишина в нем царит гробовая. От леса до горизонта тянется белое поле... И конца не видно этому полю. В лесу и по полю скачут на конях полушубки...

〈例8〉『カメレオン』は、作品全体が不完了体現在形で叙述された短編であるが、チャーホフはこのような手法を用いた作品を数多く手掛けている。こうした「歴現」用法は、長編ではなく⁴⁸ 人生の一コマを描いた寸劇風の短編を得意としたチャーホフならではの手法と言えそうである。

〈例9〉『悲しみ』では、作品の基本的な語りは〈例8〉と同様現在形で表わされているが、内容的にそれ以前の別の出来事を描写するところで過去形が用いられている。このように基本的な時間面を現在形によって描写すると、それ以前の別の語りの時間面を過去形によって表現することができ、物語の内容の2つの時間の層に対してテンスによってコントラストをつけることが可能となる。こうした効果を狙った作品としては、その他『六号宅』『かき』などがある。(〈例9〉のように基本的な語りを現在形で描写した場合に、過去形によってストーリーの展開を強調するといった、丁度プーシキンの「突然展開型」用法とテンスの移行が全く逆の用法もある)。⁴⁹

〈例10〉『女房ども』では、物語の初めに語られる状況設定部分が現在形で叙述されている。チャーホフはこのように、物語の状況設定を「歴現」を用いて表現しただけでなく、物語の途中で登場する新たな人物の説明描写にも「歴現」を用いている(『婚礼の前』『古典中学生の受難』⁵⁰など)。こうした現在形の用い方は、戯曲における卜書の役割に酷似しており、いわゆる“卜書の現在”と相通じるものがある。劇作家チャーホフの手法と言えるかもしれない。

〈例11〉『いいなずけ』は、登場人物の眼前に広がる情景を、登場人物の内的視点から描写しているようなより直接的で生き生きした叙述をもたらす「歴現」である。また一方で、登場人物の内的視点からの描写は、登場人物にとって情景がどのように見えるかということを表現し、従ってその時々的人物の心中、気分を間接的に映し出す一種の心理描写の働きをしているともいえる。

このように、現在形が登場人物の内的視点からの描写機能をもつ理由は、現在形の有する“同時性(同時進行性)”にあると思われる。即ち、過去形によるアオリスト的叙述の視点が常に表現される行為の(時間的)後に置かれているのに対して、現在形による描写視点は行為の最中にあり、しかも物語の進行と共に並進移動するので、そこに登場している人物に付与された視点となるのである。チャーホフはこの心理描写の叙述効果をもつ「歴現」を『曠野』を初

め数多くの作品⁶³⁾の中で用いている。

〈例12〉『狩場で』は、回想の意味をもつ動詞“вспоминаю”によって導かれた「歴現」用法で、語彙的条件を有する点で、プーシキンの用いた「視覚動詞型」用法に類似している。「歴現」のこの用法は、Иванова⁶⁴⁾にも指摘があるが、回想動詞によって登場人物の心の奥底にある視点からの叙述となるために、現在形が現われやすいのではないかと思われる。チャーホフには“помню”を用いた例⁶⁵⁾が特に多い。

以上、チャーホフの用いた「歴現」の5つの型について作品例と共に述べてきたが、これらはすべて小説の地の文中での「歴現」であり、前述の民衆の話し言葉の中で用いられる「歴現」とは全く掛け離れた機能、性質をもっていることがわかる。従ってプーシキンの「歴現」と較べても、レトリックの点で、より高度（より人工的）な文学的手法であるといえる。

(3)修辭学的手法としての「歴現」用法は、他にもまだ色々とあるかもしれないが、上述したプーシキンとチャーホフの作品例によってその代表的な用法はある程度包括できたのではないかと考える。

ただ補足として、ロシア文学のジャンルの中で「歴現」が非常によく用いられる形式「自伝的小説」について簡単に説明を加えておく。

〈例13〉⁶⁴⁾ Меня держит за руку бабушка, — круглая, большеголовая, с огромными глазами и смешным рыхлым носом; она вся черная, мягкая и удивительно интересная; она тоже плачет, как-то особенно и хорошо подневая матери, дрожит вся и дергает меня, толкая к отцу; я упираюсь, прячусь за нее; мне боязно и неловко.

トルストイやゴーリキイの作品には、不完了体現在形が地の文中で多用されている自伝的小説がある（〈例13〉はゴーリキイの『幼年時代』）。この形式は一種の一人称小説であるが、主人公と語り手と作者が同一人物であるため、語りの中に作者の主観的評価（モダリティー）が加わりやすく、そのために現在形が多用されるのではないかと思われる。⁶⁶⁾ しかしこうした特徴は、英語や独語などではなく、ロシア語特有の「歴現」用法となっている。⁶⁶⁾ ただ分析に際しては、いわゆる“作者の逸脱の現在”（『トリストラム・シャンディ』や『エヴゲーニイオネーギン』に多用されているような）と厳密に区別することが重要である。

4. 歴史的事実を記述する場合の「歴史的現在」用法

〈例14〉⁶⁷ В 1884 г. Чайковский пишет оперу «Пиковая дама».

この用法は、客観的に過去の出来事であることが明らかである内容（多くの場合時の副詞句を伴う）を現在形で表わしたもので、表現者がそれを書く時点での評価を踏まえて表現するために、現在形が用いられると考えられる。類似の用法に、いわゆる“年表の現在”があるが、それは一つの歴史的事実を全体として一つの概念として名詞的に捉えるために、過去形ではなく超時的な現在形が用いられる用法であり、両者は区別して扱うべきものである。

この用法は、民衆の「歴現」のように話し言葉に現われるものでもなく、レトリックの「歴現」のように文学作品の中で多用されるものでもないが、過去形が用いられるべきところで現在形が使われるという点で、他の2つの用法と同様、「歴現」用法と見るべきである。

16—17世紀の中世ロシアの歴史書の中には、この用法がさかんに用いられた。

〈例15〉⁶⁸ В лето 7106 генваря в 7 день угасе свеча страны Руския, померче свет православия, — государь царь и великий князь Феодор Ивановичь всея Руси самодержец приемлет нашествие облака смертнаго, оставляет царство временное и отходит в жизнь вечную; был на господарстве 13 лет и 7 месяцев и 10 дней.

Лихачев⁶⁹ は、この現在形を時代の流れをゆるやかに叙述する機能をもつ時称用法であるとしているが、〈例14〉と同様に、書き手が歴史的事実を書き手の時点からの評価を含めて表現したために現在形を用いたものと解釈した方がよさそうに思われる。

以上、「歴現」用法について実例を挙げて説明及び検討を加えてきたが、最後にここで扱った用法の一覧を掲げておく。

(1) 民衆の話し言葉の中で使われる「歴現」

- a) 古代ロシア文学『イーゴリ遠征物語』〈例1〉
- b) ブイリーナ（主人公の穏やかな動きを表わす現在形）〈例2〉
- c) 民話（アファナーシエフの例）〈例3〉
- d) クルイローフ『寓話詩』（過去形の枠内で使われる現在形）〈例4〉

- e) 直接話法の導入動詞の現在形〈例5〉
 - (2)文学のレトリックとして使われる「歴現」
- a) 突然展開型（レーマ強調型）〈例6〉
- b) 視覚動詞によって導かれる現在形〈例7〉
- c) 全文現在形型（語りの現在形）〈例8〉
- d) 語りの2つの時間層を作る「歴現」〈例9〉
- e) 「歴現」中の過去形によるレーマ強調用法〈例：注47〉
- f) 状況設定型（プロローグの現在形）〈例10〉
- g) 登場人物の説明描写の現在形〈例：注48〉
- h) 登場人物の内的視点への移行を示す現在形〈例11〉
- i) 回想動詞によって導かれる現在形〈例12〉
- j) 自伝的小説における現在形〈例13〉
- (3)歴史的事実を現在の時点からの評価において記述する場合の「歴現」
 - 〈例14〉〈例15〉

5. 結論

以上、不完全ながら「歴現」用法の全体像を捉える試みとして、広義の「歴現」における様々な実例を取り上げて吟味してきた。これらの結果からまず実感としてわかることは、「歴現」用法と一口に言っても、その機能はきわめて多岐にわたっており（文学のレトリック用法においてはその機能は生産的でさえある）、それを文法書のわずかなスペースの中で説明することは不可能に近いということである。

ここでは、前章までに形づくられた「歴現」の全体像を踏まえた上で、従来の諸文法書の「歴現」の扱い方における問題点を幾つか指摘し、管見を添えて結論に代えたい。

(1)「歴現」を説明する場合は、①民衆の話し言葉としての用法、②文学のレトリックとしての用法、③歴史的事実を記述する場合の用法の3つのすべてについて扱う必要がある。文学のレトリック（や民衆の俗語的語法）を言語学の研究対象とすることには抵抗があるかもしれないが、たとえ一作家の手法であっても、もし作家の用いた「歴現」が一般の読者にその作家の意図したように伝わり、何らかの効果を与えたとするならば、両者のコミュニケーションの間には、その現在形用法に対して言語学的な共通の拠り所（コード解説ソフト）が存在したわけであり、その言語的な共通基盤を研究対象として扱うことは、

言語学的に見て何ら問題のないところと考えられる。むしろ、3つの用法の中で一用法に偏った扱いをすること（特に『70年版現代ロシア語文法』や『プラハ版ロシア文法』においてそうである）は、「歴現」の本質を見誤る恐れがある。

(2)従来の伝統的な文法解釈の中で、「歴現」の指標として必ず言及される、“出来事が今、眼前で行なわれているような生き生きした臨場感を生み出す事”は「歴現」にとって、必要条件でもなければ、その主たる機能でもなく、前章までに見てきたように、「歴現」用法の中のほんの一部の用法における効果に過ぎないのである。こうした誤解を生んだ原因は、現在時称と現在時間との混同、および文章テキストにおける語り時と会話における発話時との強引な結び付けにあった（即ち、述語動詞が過去時称から現在時称に移ることによって、テキストの内容も物語の時から語り手（読者）の時に移行するというもっとならしい考え方にあった）と筆者は考えている。こうした安易な説明によって、臨場感効果と「歴現」とを不可分のものと見なしてしまったのである。

(3)文学のレトリックとしての「歴現」用法に関して言えば、Бондаркоのように文章テキストよりも会話の分析に適した発話時や基算点⁶⁰を用いての時間的視点による分析や説明にはどうしても無理があり（例えばチェーホフの多くの「歴現」用法において）、むしろ、Виноградовや Twaddell, Kiparsky⁶¹のように現在時称の第一義を“超時性（無時間性）”に置き、また更に一步進めて、Поспелов⁶²のように“相対的同時性”に置くことによって、語る視点の空間的移動によって「歴現」のメカニズムを説明する方がより説得力をもちうるように筆者には思われる（例えば、前章の「歴現」用法(2) a, b, h, i, j などにおいて）。更に具体的に言えば、過去時称から現在時称への移行は、登場人物の時から書き手（語り手）の時への移行を表わすのではなく、時は移行せずに登場人物の時のまま⁶³であり、ただ語りの視点が登場人物と距離をおいた外側の視点から登場人物の内側の視点に移行する⁶⁴と考えるわけである（詳しくは注^{63,64}参照）。

また、文学テキストにおいては、語り手の側からの分析よりも、読者の側からの分析（認知科学的分析）の方が、例えば臨場感などの心理的要素を考える上で重要であることも頭に入れておかねばならない。

文学のレトリックとしての「歴現」用法において、もう一つ確認しておかねばならないことは、この用法では「過去の出来事を現在時称で表わす用法」と簡単に言えないことである。文学テキストの叙述テンスとしてふつう用いられ

る過去時称が過去の事を指していない事については、Barthes を初め既に多くの指摘⁶⁴があり、上述の表現は次のように言うべきかもしれない。「ふつう過去形を用いるべきところに現在形を用い、何らかの効果を読者に与える用法」。この問題については更に検討が必要である。

(4)民衆の話し言葉としての「歴現」用法においては、(3)の場合とは逆に、語り手の側からの分析が中心となる。その場合注意すべきことは、語り手の主観的表現としての「歴現」用法において、どこまでをテンスの問題として、つまり「歴現」として認めるかということである。一部に、話し言葉における「歴現」用法を語り手のモダリティーとして捉える考え方がある（例えば、「現在形は語り手の内的主観表現である」「話し手は物語の筋の流れの変わり目で時称を交替させることが多い」……）⁶⁴が、「歴現」はあくまでテンス用法として捉えるべきであり、ムード用法としての現在形ではないということを銘記すべきである。

(5)最後に、「歴現」の研究には、文体論、修辞学だけでなく、情報科学、認知科学、心理言語学、テキスト言語学など新しい学問の成果をも反映させた総合的な研究姿勢が望まれる。

注(1) 本論文は、昨年10月の学会報告のまとめであるが、一部プーシキンとチューホフの小説における「歴史的現在」用法についての詳しい比較分析に関しては、拙稿「プーシキンとチューホフの散文小説における「歴史的現在」を中心とした不完了体現在形用法の比較」《RUSISTIKA IV》〔東大露文紀要〕（1987年）を参照のこと。

(2) *Грамматика русского языка. т. I. Морфология.* М., Изд-во АН СССР, 1952. То же. М., 1960 (p. 482-483)

(3) Виноградов В.В. *Русский язык (Грамматическое учение о слове).* М.-Л., 1947; 2-е изд. М., 1972 (p. 450)

(4) *Грамматика современного русского литературного языка.* М., 1970 (p. 359)

(5) *Русская грамматика.* т. I Praha, 1979 (p. 171)

(6) Jakobson R. *Zur Struktur des russischen Verbums.* Pragae, 1932 (p. 78)

(7) *Русская грамматика.* т. I М., 1980 (p. 632)

(8) “地の文” “会話の文” はより厳密に言えば、Benveniste E. *Problèmes de linguistique générale.* Paris, 1966 における「物語」と「談話」の対立に当たる（Поспелов は「インフォメーション」と「コミュニケーション」の2つに分けている）。「物語」は非人称的な語りを指し、「談話」は語り手の具体的に存在する語り（おしゃべり）を意味する。

- (9) “語りの時間面の一つを表わす「歴現」”とは、本論文の(2)d) “語りの2つの時間層をつくる「歴現」”の用法の意味である。
- (10) Бондарко А. В. *Настоящее историческое глаголов несовершенного и совершенного видов в славянских языках*. Автореф. канд. дис. Л., 1958; он же. “Настоящее историческое глаголов несовершенного и совершенного видов в языке русских памятников XV-XVII вв.” *Учен. зап. ЛГПИ им. А. И. Герцена*, т. 173, 1958 (р. 55-71); он же. “Настоящее историческое в славянских языках с точки зрения глагольного вида.” сб. *Славянское языкознание*. М., 1959 (р. 48-58); он же. *Вид и время русского глагола*. М., 1971
- (11) Кузнецов П. С. “К вопросу о *praesens historicum* в русском литературном языке.” *Доклады и сообщения филологического факультета МГУ* т. 8, 1949 (р. 24-36)
- (12) Křížková H. “K problematice *praesentis historiceho* v ruštině a v češtině.” *Sovětská jazykoveda*, V, s. 4 Praha, 1955
- (13) Поспелов Н. С. “Прямое и относительное употребление форм настоящего и будущего времени глагола в современном русском языке.” сб. *Исследования по грамматике рус. лит. языка*. М., 1955 (р. 206-246); он же. “О двух рядах грамматических значений глагольных форм времени в современном русском языке.” *ВЯ* 1966 № 2 (р. 17-29)
- (14) Прокопович Е. Н. “Об одной функции форм настоящего времени в современном русском языке.” *РЯвНШ* 1969 № 6 (р. 72-75); она же. *Глагол в предложении. Семантика и стилистика видо-временных форм*. М., 1982
- (15) Авдеев Ф. Ф. *О месте исторического настоящего в системе грамматических значений времен современного русского языка*. Изв. Воронежского гос. пед. ин-та. т. 146 Воронеж, 1975
- Иванова В. М. “Переносное употребление форм настоящего времени глагола в языке художественной литературы.” *РЯвШ* 1969 № 2 (р. 83-85)
- Тураева З. Я. “Категория времени. Время грамматическое и время художественное.” М., 1979
- Шмелев Д. Н. “Абсолютное и относительное употребление форм времени русского глагола.” *РЯвНШ* 1960 № 6 (р. 3-10)
- Forsyth J. *A Grammar of Aspect. Usage and Meaning in the russian Verb*. Cambridge at the university press, 1970 (р. 170-)
- (16) Прокопович (注14 “Глагол” р. 269) ほか。
- (17) 完了体現在形が過去の表現として用いられるのは, “бывало” “как” “не”などを伴った場合, 方言 (ノヴゴロドなど), ブイリーナ (アオリスト的先行性を表

- わす用法として) などにおいてであるが, 本論文では扱わなかった。
- (18) Jespersen O. *The Philosophy of Grammar*. London, Allen and Unwin, 1924
(邦訳『文法の原理』1958年 p. 363)
 - (19) Потебня А. А. *Из записок по русской грамматике*. т. 4 вып. 2 М., 1977
(p. 194)
 - (20) Кузнецов (注(1) “К вопросу” p. 26)
 - (21) Бондарко (注(10) “*Настоящее ... XV-XVII вв.*” p. 58) によれば, 『イーゴリ
遠征物語』には全部で68の「歴現」用法がある。
 - (22) “Слово о полку Игореве.” (Jakobson R. *Selected Writings*. IV: *Slavic
Epic Studies*, La Haye, Mouton, 1966) III-18.
 - (23) Прокопович (注(14) “Об одной функции” p. 72)
 - (24) “Иван Гаденович” (*Древние российские стихотворения, собранные
Киршею Даниловым*. Издание подготовили А. П. Евгеньева и Б. Н.
Путилов М.-Л., 1958 (p. 98)) より。
 - (25) Афанасьев А. Н. *Народные русские сказки*. т. 3 М., 1958. “Василий-
царевич и Елена Прекрасная”. より。
 - (26) Лихачев Д. С. *Поэтика древнерусской литературы*. изд. 2 Л., 1971
(p. 264)
 - (27) Крылов И. А. *Басни*. кн. 3 IV “Слон и Моська”. より。
 - (28) Гвоздев А. Н. *Очерки по стилистике русского языка*. М., 1955 (p. 210)
 - (29) “Волк и Ягненок” “Ларчик” “Ворона и Лисица” “Муха и Дорож-
ные” “Крестьянин в беде” など。
 - (30) Wolfson N. “The Conversational Historical Present Alternation”. *《Language》* No. 55 1979 (p. 170)
 - (31) テクストなどにおいて, 述語が現われる度に毎回テンスを示さなければならない
こと。redundancy については次の本に詳しい。Lyons J. *An Introduction to
Theoretical Linguistics*. Cambridge, 1968 (邦訳『理論言語学』1973年 p. 91)
 - (32) Лесков Н. С. *Очарованный странник*. гл. 1 より。
 - (33) Успенский Б. А. *Поэтика композиции*. М. 1970 (p. 97) (邦訳『構成の詩
学』1986年) に言及箇所あり。
 - (34) 石橋幸太郎編『現代英語学辞典』成美堂1973年 (p. 719) の「歴現」の項に, 俗
語的な表現として “says I” が挙げられている。
 - (35) Schiffrin D. “Tense Variation in Narrative”. *《Language》* No. 57, 1981 (p.
46) には, 「英語の会話において動詞 say が直接話法を伴って用いられるコンテ
クストにおいては用例の63%までが「歴現」となる」とある。
 - (36) 「語り」記号学研究 No. 6, 東海大学出版会1986年 (p. 68) に, 「日本語の場合,
直接話法に伴う “言う” またはそれに相当する動詞は, 現在形で用いられること
がとりわけ古文では多い」とある。
 - (37) Пушкин А. С. “Выстрел”. (*Собрание сочинений в десяти томах*. т. 5

- М., 1975) (Кузнецов は, “Выстрел” におけるこの「歴現」の用法を見逃している (注(11) p. 32 参照)。
- (38) Пушкин А. С. *Капитанская дочка*. гл. IX
- (39) 英語の「歴現」では, but then, and then が, (как) вдруг と同じ意味機能として用いられる (Тураева З. Я. 注(15) p. 80 参照)。また all of a sudden を挙げている学者もいる (Wolfson 注(30) p. 174 参照)。
- (40) Успенский (注(33) p. 96) は, 「現在形の場合すべての叙述は, その各場面が共時的視点からあたえられている一連の (静止) 場面に分割されるように思われる。これらの場面の中で時間は停止しているかのようなのである。ところが一方, 過去形の動詞は一つの場面から次の場面に移る際に生じる変化を記述しているのである」と言って, 現在形の時間停止機能を説明している。同様の指摘は, 次の文献にもある。Виноградов В. В. “Стиль *«Пиковой Дамы»*”. кн. *О языке художественной прозы*. М., 1980 (p. 229); Солганик Г. Я. *Синтаксическая стилистика*. М., 1973 (p. 145); Пospelов (注(13) “Прямое и относительное употребление”. p. 220)。
- (41) 例: Только, понимаешь, выхожу от мирового, глядь — лошадки мои стоят смирнехонько около Ивана Михайлова。
- (42) Пушкин А. С. *Дубровский*. т. 1 гл. VIII “Вдруг боковая дверь отворилась, двое слуг вталкивают в нее француза и запирают ее на ключ”
- (43) Чехов А. П. Хамелеон. (*Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах*. т. 1-10 М., 1974. т. 3 p. 52)
- (44) Чехов А. П. *Горе*. (т. 4 p. 230)
- (45) Чехов А. П. *Бабы*. (т. 7 p. 340)
- (46) Чехов А. П. *Невеста*. (т. 10 p. 206)
- (47) Чехов А. П. *На охоте*. (т. 2 p. 339)
- (48) この「歴現」の手法は長編の作品の場合は難しいであろうと思われる。読者は, アオリスト的な機能, 即ち時間的な進行と共に物語を叙述する機能をもつ過去時称による語りによって初めて物語を次々に追体験していくことができるのであって, そうしたアオリスト的な機能をもたない現在時称による叙述においては, 不安感や緊張感がつのって読者はある程度の長さまでしか物語についていくことができないからである。
- (49) <例> “Идем с ним рядом, — он тоже на лыжах, — говорим о том, о сем. Вдруг он засмеялся...” (Куприн А. И. *Убийца*. より)
- (50) <例> “Евтихий Кузьмич — человек умный и образованный. Он говорит в нос, умывается с мылом, от которого пахнет чем-то таким, от чего чихают все в доме, кушает он...” 「古典中学生の受難」より。その他, 「安全マッチ」「不注意」「箱に入った男」「僧正」などに同様の例がある。
- (51) 「不快な出来事」「百姓たち」「僧正」「探訪記者の夢」「ある邂逅」「妻」「隣人た

ち」「無名氏の話」「生まれ故郷で」など。

- (52) Иванова (注(15) p. 83)。
- (53) 「美女」「泥棒たち」「無名氏の話」「わが人生」「夢」など。
- (54) Горький М. *Детство*. (*Собрание сочинений в 25 томах* М., 1972 p. 9) より。
- (55) Николина Н. А. “О языке повести Л. Н. Толстого *《Детство》*”. *《РЯвШ》* 1978 № 4 (p. 79); она же. “Структура повествования в автобиографической прозе”. *《РЯвШ》* 1986 № 4 (p. 59)
- (56) ゴーリキイの『幼年時代』の英訳の時に、地の文中にあまりに現在形が多用されているので翻訳者が困ったという話しがある。
- (57) 『70年版現代ロシア語文法』(p. 359)
- (58) *Изборник славянских и русских сочинений и статей, внесенных в хронографы русской редакции*. Собрал и издал А. Попов. М., 1869 (p. 188) より。
- (59) Лихачев (注(26) p. 318)
- (60) 基算点 “точка отсчета” は、H. Reichenbach が *Elements of symbolic logic* N. Y. 1974. の中で英語の過去完了の説明に導入したのが最初で、今では、Г. А. Золотова, З. Я. Тураева とも、談話やテキストのテンス用法の説明に活用している。
- (61) Виноградов (注(3) p. 450); Twaddell W.F. *The English verb auxiliaries*. Providence. Brown University Press. 1960 (p. 5); Kiparsky P. “Tense and mood in Indo-European syntax”. *Foundations of Language* No. 4 (p. 35)
- (62) Пospelов (注(13) “Прямое и относительное ...” p. 212)
- (63) 時称の交替によって、視点が時間的に移行しない理由について。

文学テキストを読む時、読者は物語の時間と共に生きて、物語の主人公の追体験をしている。例えば、「ラスコーリニコフは手さぐりに斧を確かめると、薄暗い階段を一步一步上がっていった」という文を読む時、読者は自分がそのラスコーリニコフになって、まさに今階段を登っているのである。即ち、たとえ過去時称でテキストが語られていても、読者は物語の展開が現在進行しているかのように感じながら読書をしているわけである。決して過去の物語を振り返る視点で読書をしてはいない。従って、その後、語りの時称が現在形に変わったとしても、視点はやはり物語の流れの時間の中にあるわけであるから、結局、時間的な視点移動は起こっていないということになる。(ここでは、「歴現」が文学のレトリック用法であるので、視点が語り手の視点ではなく読者の視点から考察していることに注意せよ)。

- (64) 叙述の視点が登場人物と距離をおいた外側の視点から、内側に移るメカニズムについては、次のように考えられる。

まず文章テキストにおける現在時称の本義を、Пospelов の指摘のように「同時性」に置く。その根拠は、そもそも文学テキストというものが文の連なりであり、文と文との相関関係によって成り立っているものであり、その中で用いられる時称

の性質も前文や前文脈との関係において相対的に決定される時間を表わしていると考えられるからである。例えば、複文における主文に対する従属文の時称の役割を考えてみれば、時称が相対的な時間、つまり「同時」「以前」「以後」の指標の機能を果たしていることがわかるはずである。このことは会話における時称が「発話時」を基準とした絶対的な時間、つまり「現在」「過去」「未来」を表わすことときわめて対照的である。結局、テキストにおいては、会話における「発話時」に相当する「書き時（読み時）」にテンスの基準となるだけの力がないということである。

このように、テキストにおける現在時称の機能を「同時性」、過去時称を「以前性」とそれぞれ規定すると、過去時称によって叙述された出来事は、その出来事後の視点からの描写となり（その結果、アオリスト的機能やペルフェクト的機能をもつようになる）、一方現在時称によって叙述された出来事は、その出来事の進展と同時に進行する視点からの描写、つまりそこに登場している人物（多くは主人公）の視点からの描写となる。

その結果、過去形から現在形への時称の移行によって、出来事の叙述視点が、出来事と距離をおいたある程度ニュートラルな客観的な視点から、登場人物に付随した視点、つまり登場人物の眼を通した視点へと移ると考えることができる。後に、心理描写に現在形が好んで用いられるようになるのもこのことと関係があると思われる。

- (65) Barthes R. *Le Degré Zéro de L'Écriture*; Éditions du Seuil, 1953 (邦訳『零度のエクリチュール』1971年 p. 31); Weinrich H. *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*, 1971 (邦訳『時制論』1982年 p. 20); 細江逸記『動詞時制の研究』（新訂版）篠崎書林 1973年 p. 6; Маслов Ю. С. *Очерки по аспектологии*. Л., 1984 (p. 182); ほかに多数。
- (66) Wolfson (注30) p. 174); Wolfson N. *The Conversational Historical Present in American English Narrative*. Dordrecht, 1982.

К вопросу о “настоящем историческом” в русском литературном языке

Масуми КИНДАИТИ

В настоящей статье на многих конкретных примерах рассматривается “настоящее историческое” (НИ) в широком смысле этого понятия (термина). На основе результатов анализа этих данных вскрываются недостатки объяснения и интерпретации НИ в предыдущих исследований по грамматике русского языка.

Статья делится на 3 главы, посвященные 3 типам НИ, и главу с

выводами.

В первой главе рассматривается НИ, употребленное в простонародной разговорной речи. При этом приводится много примеров из древнерусского эпического произведения “Слово о полку Игореве”, произведений устного народного творчества (былины, сказки), басен Крылова и т. д.

Во второй главе тщательно рассматривается НИ, употребленное в художественной литературе как риторический прием. Этот прием можно разделить на 8 вариантов по его функциям.

- 1) НИ, употребленное при повествовании неожиданного развертывания для того, чтобы подчеркнуть лему (новое).
- 2) НИ, употребленное следом за глаголом, связанным со значением зрения: видеть, смотреть, глядеть, ..., для большей живости выражения.
- 3) НИ, употребленное следом за глаголом, связанным со значением воспоминания: вспоминать, помнить.
- 4) НИ, употребленное в авторском повествовании художественных произведений как единственное средство передачи событий вместо прошедшего времени.
- 5) НИ, употребленное в начале рассказа для объяснения и установления его начального положения и ситуации.
- 6) НИ, употребленное для объяснения действующих лиц в виде комментария.
- 7) НИ, употребленное при перемещении точки зрения в авторском повествовании от внешнего мира действующих лиц на одного из действующих лиц.
- 8) НИ, употребленное часто в автобиографическом повествовании.

В третьей главе рассматривается НИ, употребленное при описании исторических событий на основе оценок нашего времени.

В результате анализа данных этих трех глав можно сказать следующее:

1. НИ обладает различными функциями и придает повествованию различные окраски, как стилистические, так и психологические.
2. При рассмотрении НИ весьма удобно делить способы употребления НИ по языковым сферам на 3 типа: НИ, употребленное в простонародной разговорной речи; НИ, употребленное в художественной литературе как риторический прием; НИ, употребленное при описании исторических событий.
3. Средство образной актуализации прошедших событий — это не основ-

ная функция, а только одна из многих функций НИ.

4. Объяснение механизма НИ с помощью понятий “момент речи” и “точка отсчета” может быть эффективным лишь для НИ в устной речи, но это объяснение не подходит НИ в художественной письменной речи. В этом случае лучше объяснять НИ с помощью понятия “относительного времени”, т. е. “одновременности”.
5. Обычно замена прошедшего времени настоящим, которая используется в качестве приема художественной риторики, считается за “временное” перемещение точки зрения повествования, но на самом деле более удобно считать ее за “пространственное” перемещение точки зрения повествования, т. е. перемещение от внешнего мира действующих лиц на одного из действующих лиц.
6. При анализе НИ, используемого в качестве приема художественной риторики, важно рассуждать с учетом слушателей (читателей), а при анализе НИ, используемого в простонародной устной речи, важно рассуждать с учетом повествователя (писателя).
7. В НИ, используемом в простонародной устной речи, надо обратить основное внимание на обращение с субъективностью повествователя с точки зрения категории времени, а не наклонения.